# 中部のエネルギーを築いた人々

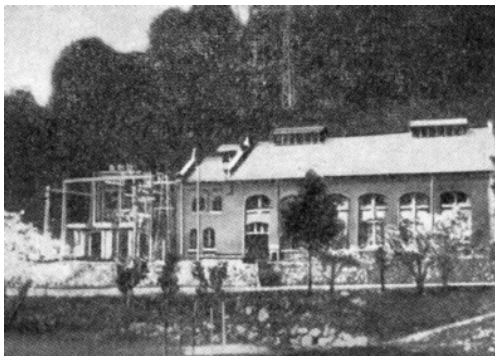
## 福沢桃介と松永安左エ門に仕え補佐した 角田 正喬

角田正喬
（出典：『賤母水力』木曽電気興業編、大正９年）

角田正喬は、名古屋電灯が東邦電力・大同電力へと転換する過程において、福沢桃介・松永安左エ門の２人の経営者に仕え補佐した電力人である。角田正喬は、明治10年10月、角田徳太郎の長男として群馬県に生まれた。幼少より俊英で、慶応義塾理財科へ進み明治36年に卒業した。大学卒業後、日本綿花（後の日綿実業、現双日㈱）に入り上海支店に勤務した。日本綿花は内地の綿花だけでは原料綿が不足するなか、外国綿の直輸入を目的に明治25年に設立された。角田は明治36年に新設された上海支店の業務に携わり、中国事業の拡大と多角経営を軌道に乗せた。

日本綿花上海支店（双日歴史館提供）

上海支店で６年勤務した後、明治43年９月、角田は九州電気へと移籍した。九州電気は広滝水力電気の後身会社として明治43年９月に設立され、福沢桃介・松永安左エ門が取締役



広滝水力発電所
（出典：『九州地方電気事業史』平成19年）

福沢桃介

松永安左エ門
（出典：『東邦電力史』昭和37年）

九州電灯鉄道本社
（出典：『九州地方電気事業史』平成19年）

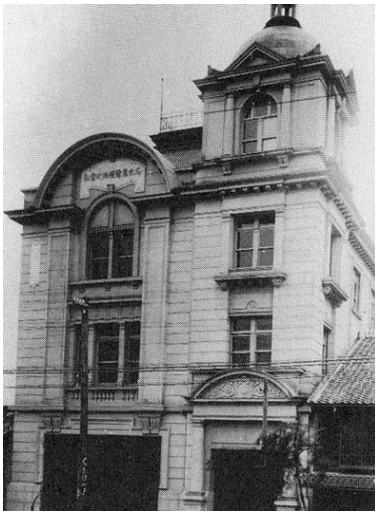
を務める会社である。角田は、支配人田中徳次郎のもとで支配人代理となり、実務経験を積み、さらに博多電灯軌道と合併して九州電灯鉄道が設立されると、支配人に就任した。

## 名古屋電灯の改革

大正２年２月、名古屋電灯の支配人へと転じた。九州電灯鉄道での支配人は１年に満たない期間であった。福沢桃介は、明治43年から名古屋電灯に関わっていたが、大正２年１月から経営立て直しを託された。このとき経営体制の一新をはかり、九州で実績を挙げていた38歳の角田正喬を抜擢したのである。当時名古屋電灯の幹部は、地元出身者が固めていたが、角田は福沢の精神を汲み、福沢の腹心として実務を取り仕切った。福沢が招き入れたもう１人の協力者、下出民義（愛知石炭商会）が専ら対外活動にあたったのに対し、実務に明るい角田は社内改革に取り組み、経営立て直しを成功させた。大正６年12月に取締役（大正８年３月まで支配人兼務）となり、同８年10月には常務取締役へと累進している。

角田の名古屋電灯の経営改革については『名古屋電灯株式会社史』が詳しい。すなわち、①供給電灯数を整理し、収支計算の基礎を確立した（従来営業部と技術部で電灯数に大きな隔たりがあった）、②集金人の給与を取立戸数の歩合制への変更、徴収金の銀行振込制度（従来は会社に持参）を実施し、売掛金未収額の削減をはかった、③不要不急の在庫品の整理を断行し経費の節減をはかった、④高燭力電灯の普及促進、市内営業体制の再編（４営業所制）により、販売力の強化をはかった。大正２年９月が名古屋電灯創立25周年に当たることから、販路拡張の大キャンペーンを展開し、１ヶ月間に１万2900灯、下期全体で３万5000灯の増灯を見た。

その後第１次大戦ブームの中、福沢は木曽川の水力開発に取り組んだ。大正７年９月、木曽川開発と電気製鉄の事業化を目的に、木曽電気製鉄が設立されると、角田は取締役となり、木曽電気興業、大同電力へと事業が拡大するなかで取締役を続け、昭和４年12月に辞している。



名古屋電灯本社

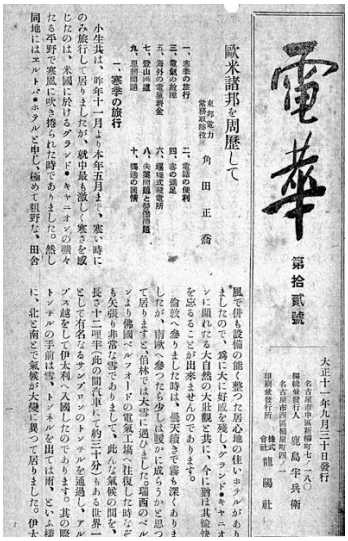
名古屋電灯25周年記念広告
（出典：『名古屋新聞』大正２年９月26日）

# 東邦電力での活躍

大正10年10月、名古屋電灯が関西水力電気と合併して関西電気となると、角田は常務取締役に就任し、さらに同社が九州電灯鉄道と合併して東邦電力になると、松永安左エ門の下で常務を務めた。東邦電力へと改称する直前、大正10年11月から翌年５月まで、欧米諸国を歴訪した。東邦電力では有能な幹部役職員を海外の視察・調査に派遣したが、その第１号が角田であった。

帰国した角田は、大正11年７月新設の調査部の部長に就任する。調査部は、「調査研究に裏打ちされた科学性・合理性の追求」を担う東邦電力の戦略部門で、前身の臨時調査部時代は、松永安左エ門（副社長）が部長を務めていた。角田の進めた超電力連系に関する調査は後の松永の電力構想の基礎となるものであった。

東邦電力名古屋支店社屋
（出典：『東邦電力史』昭和37年）



電華　第拾貳號

大正十一年九月三十日發行

欧米諸邦を周歴して

角田正喬

一、歐米の旅行　二、雪の倫敦
三、歐米の感想　四、巴黎の倫敦
五、海外の感想雜感　六、羅馬式發電所
七、發電所視察　八、矢羅河畔石炭問題
九、巴黎印象　十、瑞國の印象

一、歐米の旅行

小生共は、昨年十一月より本年五月まで、寒い時にのみ旅行して居りましたが、就中最も激しく寒さを感じたのは、米國に於けるグランド・キャニオンの頃々なる平野に寒風に吹き捲られた時でありました。然し同地にはエルト・ホテルと申し、極めて粗野な、田舎風で併も設備の能く整つた居心地の佳いホテルがありましたので、爲に大に好感を残し、グランド・キャニオンに臨れたる大自然の大壯觀と共に、今に證に其絵葉書を忘ることが出來ませんのであります。

倫敦へ參りました時は、恰度霧深くあまりしばしば、雨降へ參つたら少し感激かに成らうかと思つたが、雨降へ參つたら少し感激かに成らうかと思つて居りますと、伯林では大雪に逢ひました瑞西のベルンより佛國ベルフォードの電氣工場へ社仮した時なども矢張り非常な雪でありまして、此んな氣候の間を、長さ十二哩半、此の間汽車にて約三十分もある世界一として有名なるサンプロンのトンネルを通過し、アルプス越をして伊太利へ入國したのであります。其のトンネルの手前は雪、トンネルを出ては雨、といふ樣に、北と南とで氣候が大變に異つて居りました。伊太

角田正喬「欧米諸国を周訪して」
（出典：『電華（12号）』大正11年９月）

福沢桃介が財界活動から身を引くと（昭和３年６月）、角田も第一線の活動から退いていく。昭和４年12月には、大同電力の取締役を、また同月東邦電力の常務取締役を退き、その後11年12月まで同社監査役を務めた（その後の活動は不明である）。

角田は事業経営のトップに立つことはなく、福沢、松永の補佐に徹した電力人であり、経理に長じ、職務に忠実で、責任感が強い人物だった。『電華（66号）』（昭和２年４月）には角田常務の新入社員に対する訓辞が掲載されている。その中で角田は「高き理想と強気意志をもって職務に当たれ」「電気事業は利益をあげるだけでなく、公益を念として事業にあたらねばならない」「フレッシュな頭で事業改革を進めてほしい」と語っているが、これは角田自らの信条でもあったのであろう。

**（浅野 伸一）**